

展望
----

## タイ国において衛星放送を用いた日本語遠隔教育を支援する シニアボランティアの派遣とその課題

大作 勝 (長崎大学) <sup>1a)</sup>

秋畑 進 (元 (株) ジャルウェイズ) <sup>1b)</sup>

徳久 勲 (岩手県立大学) <sup>1c)</sup>

タイ国における衛星放送を用いた日本語教育について記述した。衛星放送の地方サイトでの利用促進のためには、どのような手立てが必要か、また地方サイトにおける学習支援をすすめるには、どのような手立てが必要かについて論じた。さらに学習支援を進める手立ての一つとしてのシニアボランティアの派遣は、実際にどのような効果が期待されるのかについて述べた。これらのボランティア活動とこれからのわが国のシニア世代の生きがいの関係、さらには国際協力への寄与について述べ、当該企画の実施を継続するために今後解決すべきいくつかの課題について論じた。

**キーワード：**衛星放送, 日本語教育, 学習支援, 国際協力, シニアボランティア

### 1. はじめに

フアヒンの衛星放送を介した教育プロジェクトは、タイ国の王立プロジェクトとして 1995 年に始まった。このプロジェクトの詳細に関しては、すでにいくつかの報告がなされているが (大作, 2003), ここでもごく簡単にまとめておく。本プロジェクトの中心をなす衛星放送は当初タイ国における中等教育部分での利用に始まり、後に高等教育, 社会教育, 就学前 (幼稚園) 教育, 初等教育の各部分へと拡大され現在にいたっている。今日ではおおむね 14~15 チャンネルを同時に用いての広範な教育がなされている。

外国語教育に関しては中等教育の (わが国の) 高等学校相当部分に導入されており <sup>2)</sup>, 現在は英語, 日本語, フランス語, ドイツ語, 中国語ほかにまで拡大されているが, かなり以前から継続して実施されてきた言語教育は, 英語, 日本語およびフランス語である。日本語に関していうとフアヒンからの放送は, 首都バンコク地区をはじめとした都市部における社会人の学習など本来の目的ではない利用も多くあるが <sup>3)</sup>, 地方の学校現場における衛星放送の利用状況は決して良いとはいえないのが現状であろう。本研究ではそれはなぜなのか, またどのようにすれば利用状況を高めることができるかほかについて考える。

一方でタイ国の地方における教育支援に対しわが国がこれまでに果たしてきた役割について考えると, 国際協力事業団時代からの青年海外協力隊 (協力隊) をはじめとして多くの支援がなされてきたが, 日本語教育に関して言えば協力隊の果たしている役割は, その後かなり低下していると思われる。現在国際協力事業団は独立行政法人国際協力機構となっており 2007 年 4 月 1 日時点で協力隊員 12 名が派遣されている (国際交流基金, 2008) <sup>4)</sup>。今日では NPO 法人など多くの団体と個人がタイ国の日本語教育にかかわっているが (櫻井, 2005) <sup>5)</sup>, 衛星放送との関係で地方サイトの学習支援を行う動きは, 私たちが 2006 年度から始めたシニアボランテ

イアによる支援を除き今のところ多くはないと思われる。本研究では、このシニアボランティア派遣プロジェクトが今後どのような方向に発展展開されるべきかについて述べる。

## 2. タイ国における衛星放送を使った日本語教育

### 2.1 ワンクライカンウォン学校（ファヒンの基幹学校）

王立プロジェクトの基幹校について述べる。ファヒンはバンコクから約 240 キロメートル南に位置するタイ湾沿いの小さな町である。この小さな町は古くからのリゾート地でもあるが、初等学校、中等学校をはじめ、多くの公立、私立学校が設置されており、大学等の高等教育機関も相当数設置されている学園都市でもある。この地にあるワンクライカンウォン学校の設立目的はいくつかあるだろうが、それらのうちの主なものは、①タイ国の地方での教育振興、②教員の教授レベルの向上、③高いレベルでの教育の均質化（質の保障）、④外国語教育の充実などである。これらのことからワンクライカンウォン学校での教育の特色づけとして、高レベルの教員を同時に数多く確保することが困難な分野の教育に重点が置かれていることがわかる。

ワンクライカンウォン学校は初等教育の部分と中等教育の部分に分かれている（両者の校舎は数百メートル離れている）が、運営は一体でなされている。ここでの衛星放送の仕組みを簡単に述べる。ワンクライカンウォン学校の小学（初等学校）1年～高校3年（中等学校6年）まで12学年間の各1クラスが12のスタジオを兼ねた教室内で授業を受ける。この授業は2台のテレビカメラで撮影され、これに教材呈示装置とパソコンからのデータをミックス（編集）して1本のプログラムとし、衛星を経由してタイ全土と周辺国に配信されている<sup>6)</sup>。それ以外のクラスの児童・生徒は学校内に設けられている普通の教室で授業を受ける。普通の教室といってもわが国の小、中、高等学校でなされている一般的な対面授業の部屋とは若干趣が異なっている。すなわち教室に教員はいるが、ほとんどの場合その教員は授業をする主体とはならず、教室内に設置されているテレビ上でスタジオ内において撮影された教育プログラムが衛星を経由して受信され、これを使った授業となっている。もちろん教室内にいる教員がテレビ画面との関係で説明を加えるなどの言葉をはさむことはある。衛星を経由した電波の届く範囲はタイ全土をカバーしており、さらに周辺国、ラオス、中国、ヴェトナムほかに及んでいる。また周辺国での利用形態に言及すると、以前著者らがラオスのビエンチャンの学校を訪問した際には、ファヒンで撮影されたタイ語ほかのプログラムを受信し、授業で利用していた（大作、2005）<sup>7)</sup>。

#### ・ワンクライカンウォン学校の役割

ワンクライカンウォン学校が果たしている役割について述べる（写真1～3）。本校には2つの大きな役割がある。それらは①遠隔教育の起点としての役割、および②新しいメディアを使った教育の普及である。

遠隔教育をするためには、その起点となる学校がなければならない。①について、もちろん本校のスタジオ教室と本校に設置されているDLTV（Distance Learning Television）ステーションがこの役割を果たしている。②について、ワンクライカンウォン学校では多くの場所で最新のICT（Information and Communication Technology）が駆使されている。ここでのICTは、地方サイトでのICT教育のモデルとなっているように思われる。

#### ・ワンクライカンウォン学校の改善

ここ約10年間をみるとワンクライカンウォン学校のスタジオではいくつかの改善が進んでいることがわかる。これらはスタジオ内の生徒の学習環境と地方サイトの生徒の学習環境双方

の改善につながっている。また教員スタッフの構成も変わってきている。

#### ー大きな前面テレビモニター

スタジオ兼教室内の前面には、以前のブラウン管モニターに加えて大型の液晶モニターが置かれている。画像データは鮮明に映り、文字データは非常に読み取りやすくなっている。

#### ー機材

スタジオ教室内では教材呈示装置やパソコンの利用が進んでいる。文字と画像の表示には、パワーポイントなどのソフトウェアが使われている。教員にとっては授業の準備がしやすく、生徒にとっては授業が以前よりわかりやすくなっている。

#### ー教員スタッフ

日本語教育に関していうと、以前はタイ人2名、日本人2名で授業をしていたが、現在タイ人1名、日本人2名の3名で実施されている。この結果、全授業に占めるネイティブスピーカーの授業が増加している。

## 2.2 地方サイトーラチャプラヤヌグロ学校

衛星放送を主たる教授メディアに利用して学校経営をしているのが、ラチャプラヤヌグロ学校である。ラチャプラヤヌグロ学校は現在（2008年5月）タイ全土に44校が設置されている（最初の設立校は番号なし。その後の設立校には第43校まで番号が付いている）。これらの学校は比較的辺地に設けられている（写真4～6）。したがって校内に寄宿舎を持つことが多い。多くは小学、中学、高校の12年間一貫校である。幼稚園を併設しているところもある（例えば、メーアイ）。学校内に自らの農園を持ち、家畜を飼育しているところが多い。ここで生産される農作物や畜産物は校内の食堂や学校寮での食事に際し消費されるばかりではなく、商品でもある。すなわちそれらは市場に出され、販売されることがある。これらの学校は情操教育を重んじ、また労働を尊ぶタイ国での全人教育の場ともなっている。近年これらの学校で中等教育を終えたものは、大学など高等教育機関へ進学するケースが増加している。

ここでは、なぜ地方で衛星放送を利用した日本語学習の機会が増加しないかについて考える。それにはいくつかの理由が考えられる。日本語学習について言えば、学習希望者そのものはかなり多いが、年間を通してフアヒンからのプログラムを利用しているところは少ないと思われる。フアヒンからのプログラムは進度が速い、難度が高いと思われることが一因である。さらに日本語が理解でき、生徒たちの学習の助けとなりうるファシリテータが教室内にいないなどの事情もその1つと考えられる。宮岸もこの点について言及している（宮岸, 2005）。

## 3. 日本語教育ボランティアの派遣とその役割

日本語教育を支えている日本側の教員は若者のボランティアである。このボランティア派遣プログラムについて述べる。今日までに派遣した日本語教育教員とその派遣期間を表1にまとめている（表1）。これによると派遣は1999年の新学期からとなっており、これまでに実数として13名が派遣または派遣中である。以前にも記述したが（大作, 2003）、ワンクライカンウォン学校は2学期制を採っており、年によって若干の変動はあるものの前期の授業期間は5月中旬～10月上旬、後期のそれは11月上旬～3月上旬の間である。衛星を使った授業週数は各学期ともおおむね18であるが、授業の準備期間、テスト期間、補習と成績処理の期間を含めると学校があいている期間は各セメスターあたり約20週（5か月）となる。したがって教員

の派遣は5月～10月または10月～3月を含んだ約11か月間が単位となっている。これを一応1か年と考えている。派遣期間は本人の希望による。派遣者のうち多くは1か年間であるが、2年間、3年間と延長になる場合もある。

・期待できる効果—タイ人生徒への日本語教育

タイ国では現在(2008年5月)大学入試の外国語科目として、日本語を選ぶことができる。したがって中等教育の生徒間では、全国的に日本語の学習意欲はかなり高いと思われる。ここでは生徒たちは単に日本語を学習するだけにとどまらない。わが国の産業ほかに対する関心、日本文化の理解の深化など期待できる効果は大きいと思われる。

・ボランティアとしての人材開発と支援体制

派遣している日本人日本語教師は、すべて日本語教師としての資格を有しているものである。つまり日本語教育教員の養成が可能な大学の卒業生となる。今日までに派遣したボランティア教員は、安田女子大学文学部、広島大学教育学部、長崎純心大学人文学部の卒業生であり、これらの大学では日本語教師の資格を得られる課程が存在している。ボランティアのリクルートは相当に大変である。今までのところほとんどの場合、著者のうちの一人の個人的チャンネルによっている。

ボランティア教員はかなりの経費を負担している。わが国で派遣までに要する経費のうちの主なものは、

—ビザ取得に要する費用

—旅行保険の費用

—日本—タイ間の航空運賃

などである。これらの経費は今のところボランティア教員の自己負担となっている。若者にとってはかなりの負担額である。さらにわが国での社会保険の負担をどのようにするかは課題もある。この派遣プロジェクトを今少し持続的なものにするためには、ボランティアの「若さ」と「情熱」だけに頼ってはいけないうらう。わが国の政府機関たとえば、国際交流基金などによる経済的な支援がぜひとも必要である。

・派遣ボランティア教員のその後

ワングライカンウォン学校での勤務の後、多くはその後も日本語教育にかかわって生活している。さらにタイ国に残って大学、中等学校、インターナショナルスクールなどで日本語教員として働くもの、いったん帰国後に再び海外の語学学校などで働くもの、日本に帰って教育系の大学院に進むものなどである。

#### 4. シニアボランティアによる学習支援

タイ国の2006年学校暦からフアヒンの衛星放送に関係したシニアボランティアの派遣を始めた(表2)。シニアボランティアは2006年度にはタイ北部のパイとメーアイのラチャプラヤヌグロ校に各1か月ずつ、2007年度にはタイ東部のノンカイとシーサケットのラチャプラヤヌグロ校に各1か月ずつ赴任した(図1)。フアヒンの衛星放送プロジェクトをより実効あるものにするためには、地方サイト(ラチャプラヤヌグロ校)での衛星放送プログラムの利用促進と地方サイトでの学習環境の整備が必要である。このことはかなり以前から私たちの間で懸案となっている。宮岸がこのことについて詳細に述べ、かついくつかの提言をしている(宮岸, 2005; 2006a)。しかしながら本稿でも前述しているように、フアヒンからの衛星放送は年

間とおむね 10 か月にわたって放映されており、この放送プログラムを全て受信して主たる教授メディアとして利用し、地方サイトで効率的な学習支援を行うためには、理想的にはシニアボランティアもまたフアヒンの放送期間に合わせて派遣しなければならない。このことを完全に解決することは、——私たちのグループの経済的及び人的資源から鑑みて今のところ——、必ずしも現実的とはいえない。可能なことから実行するが私たちのグループのボランティア流である。

#### ・地方サイトでのシニアボランティアの役割

地方サイトの生徒はテレビ放送を見ながら学習していることが多い。しかしながら放送メディアを通して学ぶものとフェイス・トゥ・フェイスで学ぶものとはおのずから内容が異なっており、両者は互いに補完できるということからボランティアの果たす役割は大きく、したがって派遣には重要な意義があろう（写真7）。生徒たちは放送メディアを通してだけでなく、直に日本人と接することができる。このことは対面授業の割合が少ない地方サイトにおいては殊更重要であり、特に初等中等教育では本来の教育学習活動として欠くべからざるものである。

#### ・期待できる効果

シニアボランティアは人生を始めあらゆる分野で経験が豊富である。シニアボランティアの教授活動によって、限られた範囲内であるが日・タイ両国においてわが国文化とタイ国文化の相互理解がより一層進むであろうと期待される。

#### ・教材開発

フアヒンからの教育プログラムを利用するにしても主たるメディアとして利用するには、放送時間、放送期間、プログラム内容の難易度、シニアボランティアの派遣期間などいくつかの困難が伴うであろうことは前述した。したがってこれら諸課題の一部を解決するものとして、地方サイトでの教育学習に利用するための教材の開発がぜひとも必要である。つまり今後フアヒンで使われているもの<sup>8,9</sup>とは別の地方サイト独自の教材の開発が必要であろう。このことについては日本語教育に関する研究者からも指摘されている（宮岸, 2006b）。ここでは広い意味で日本語を学ぶにしても、①実用性を旨とする、②フアヒンのプログラムのそれよりも簡単な学習内容でよい、③日本文化の理解に重点を置くなどが考えられる。したがって日本語教育というよりはむしろ、視覚に訴える日本文化の紹介がよいのかもしれない。また教材開発に際しては、わが国で日本語教育教員を養成している諸大学や国際協力基金との連携が必要である。

#### ・シニアボランティアの派遣

シニアボランティアの派遣に際しては、フアヒンでのボランティア日本人教員と同じくかなり多額の派遣費用が必要である。費用のうち主なものは、

—ビザ取得に関するもの

—旅行保険

—航空機運賃

などである。これらは現在のところシニアボランティア自身の自己負担となっている。

現地の滞在に関して、住環境はタイ側が支援することになっている。学校によって事情は異なるが、①教員用のゲストハウスを持っているところ、②教員住宅が用意されているところ、または③教員宅に寄宿の場合がある。可能ならばゲストハウスを備えているところがよいと考えている。

食生活は重要である。食事に関して言えば、タイ国はわが国と同じく米食文化の国であり、

辛さを除いて——個人差はあるが——大きな困難はないと思われる。客人を非常に大事にするタイ独特のホスピタリティーとタイ文化の理解に関しても、大きな困難はないだろう。

## 5. 今後の課題

### ・電波は国境を超える

フアヒンの教育プログラムは通信衛星を用いているためその配信範囲はかなりの広さになる。このためタイ周辺国での利用も可能であることは前述した。しかしながら衛星放送の周辺国での利用拡大を進めるには、どのようにすればよいだろうか。ラオスではすでにこれを通常の学校教育の中で利用していると述べた。さらにヴェトナム、カンボジアほかの国と地域での利用も考えられるだろう。これに関しては今後の研究調査が必要である。

### ・経済活動との関係

東南アジア諸国間では長い間の戦争と国内紛争の状態を経る国はあったが、今やそれらの国々も平和を取り戻し、これらの地域での経済発展は急速に進んでいる。道路などのインフラストラクチャーの整備も進んでいる（日本経済新聞, 2008）。そのためこれらの地域での経済活動はそれぞれの国の政治体制の違いを乗り越えて一体化し、人々と物の交流はより一層活発化するに違いない。それらの手助けのために電波が果たす役割は大きい。なぜなら電波は言葉と文化の相互理解の増進に大きく寄与すると考えられるからである。

### ・人材開発

地方での学習支援を進めるためには、とりわけシニアボランティアに関する人材開発が必要である。シニアボランティアに課せられる要件についてみると、①気力、②体力、③経済力に加えて、④語学力、⑤外国文化の理解力、ほかがある——これだけの要件を全て備えた人はそう簡単には見つからないが——。

わが国はいま高齢化社会となっている。しかしながらいかに有能であってもある年限で雇用関係がなくなることは多い。一方で経済的理由以外にも生きがいとして、外国での教育活動が可能なシニアは多いと思われる。今後多額の費用を伴わない非営利団体ないしは個人レベルの国際貢献がますます重要になるとと思われる。したがってこのことに関与できる精神的若さにあふれたシニアの力が求められている。

### ・支援体制

ボランティア教員とシニアボランティア派遣のためには、これを支援する体制の構築が必要である。もちろん予算も必要であるが、今のところ後者を解決するためのよい知恵はない。

#### —国内

わが国国内での人的ネットワークの構築が急がれる。著者たちの間でも NPO 法人の設立が叫ばれている。

#### —国外

ボランティア教員とシニアボランティアをサポートするためのネットワーク体制の構築が必要である。特に、タイ国内で日本語教育に携わっている団体及び個人の組織化が必要であろう。これにはタイ国側の参加が必要不可欠であり、また現地の国際交流基金等わが国の政府機関との連携も必要である。

## 6. まとめ

タイ国の中等教育における教育レベルを高品質に維持するために設けられた、フアヒンのワンクライカンウォン学校を中心とする衛星放送を用いた教育プロジェクトをより実効を伴ったものにするためには、——日本語教育に関して言えば——その教育プログラムの展開をワンクライカンウォン学校内にとどめることなく、地方サイトにまで拡大する必要がある。そのためには地方における教育支援が必要であり、これにはわが国からのシニアボランティア派遣がその一翼を担うであろうと期待されている。しかしながら派遣に際して解決しなければならない課題がいくつか存在する。

今後わが国サイドでも本衛星放送プロジェクトの維持のための努力が必要であり、これが今後とも維持発展されれば、東南アジアとりわけミャンマー、タイ国、ラオス、ヴェトナム、カンボジア地域の教育文化の向上に貢献することになる。

## 付記

本研究の一部は、第 15 回日本教育メディア学会年次大会、愛知淑徳大学長久手キャンパス（愛知県愛知郡長久手町）、October 18-19, 2008、にて発表の予定である（大作・秋畑・徳久、2008）。

## 注

- 1) a) 平成 20 年 3 月 31 日まで教育学部教育学研究科及びアドミッションセンター兼務、4 月 1 日以降教育学部（非常勤）； b) 元（株）ジャルウェイズ、現在所属なし； c) 総合政策学部（客員）。
- 2) 現在のタイ国の教育制度はわが国の制度とほとんど同じである。すなわち初等教育 6 年、中等教育 6 年、高等教育 2～6 年間が基本である。しかしながらわが国では中等教育は各 3 年間の中学校と高等学校に分かれていることが多いが——最近ではわが国でも 6 年一貫の公立中等教育学校も設立されている——、タイ国では 6 年一貫制のところが多い。本稿では初等教育を小学、前期中等教育相当部分を中学、後期中等教育相当部分を高校または高等学校と呼び変えているところがある。
- 3) バンコクあたりの都市部で普及しているケーブルテレビを利用すれば、フアヒンからの教育放送プログラムを受信できる。
- 4) さらに国際協力機構からはシニア海外ボランティアとして、ラジャパット大学チェンマイとラジャパット大学チェンライに各 1 名が派遣されている（2007 年 4 月 1 日現在）（国際交流基金、2008）。
- 5) タイ東北部特にラオスとの国境となっているメコン河に沿った地域（ノンカイ）における中等学校での日本語教育を支援する NPO 法人について述べている。当該 NPO 法人の名称は「市民教育交流の会（Citizens' Education Exchange Society (CEES)）」（<http://www.asahi-net.or.jp/~ww8t-oosk/index.htm>）となっており、CEES のタイ国における日本語教育事業部門として「アジア日本語教師の会」（Japanese Language Teachers for Asia (JLTA)）がこの地域及び周辺地域に、ボランティアベースで日本語教師（若者及びシニア）を派遣している。
- 6) ここで採用されているのは、——フアヒンのワンクライカンウォン学校ほかのスタジオ内

で撮影され、同時編集された教育プログラムは同軸ケーブルでバンコク近くまで運ばれて通信衛星にアップリンクされる。地方サイトの学校では衛星からの電波を受信して学習に利用する、——というシステムである。

- 7) 著者らは 2004 年 12 月 14～15 日、ラオスのビエンチャンにある学校 (Mathayomsuksa Somboon Vietian School) を訪問調査している。
- 8) 以前ワングライカンウォン学校では日本語教育に関して決まった教科書がなく、タイ人、日本人双方の日本語教員が独自に教材を作っていた。その後「国際交流基金」によって教科書が編纂出版され (2004 年)、現在はこれを使っている。本校では高校 1 年相当が 1 と 2 の教科書を、2 年に相当する学年が各 3 と 4、3 年に相当する学年が各 5 と 6 を使っている。なお、国際交流基金編の『日本語 あきこと友だち』(紀伊国屋タイランド印刷発行) の教科書は、全 6 分冊 1～6 から成り、これらの教科書に対応したワークブックも出ている。ワークブックは、教科書の各 1～2、3～4、5～6 に対応しており、全 3 分冊で構成されている (写真 8)。
- 9) 安田女子大学の宮岸哲也准教授のグループが教科書『あきこと友だち』の学習支援のためのビデオを制作しており、これはフアヒンのスタジオ内の授業で使用されている。

#### 参考文献

- 大作勝 (2003) 「ワングライカンウォン中・高等学校 (タイ国フアヒン) における遠隔教育プロジェクトと教授メディアー特に衛星放送による外国語教育の授業について」  
『教育メディア研究』10 (1) , 39-52 .
- 大作勝 (2005) 「情報通信技術を用いた遠隔教育は初等教育になじむか」  
『日本教育工学会論文誌』29 (3) , 441-446.
- 大作勝・秋畑進・徳久勲 (2008) 「タイ国において衛星放送を用いた日本語遠隔教育を支援するシニアボランティアの派遣とその課題」『第 15 回日本教育メディア学会年次大会発表論文集』K2-1, 58-61.
- 国際交流基金 (2008/6/16) 「2006 年度 日本語教育国別情報 タイ編」:  
<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2006/index.html>.
- 櫻井義秀 (2005) 『東北タイの開発と文化再編』北海道大学図書刊行会.
- 日本経済新聞 (2008/4/24) 「タイとミャンマー高速道延長で合意へ 印一東アジア結ぶ動脈に」.
- 宮岸哲也 (2005) 「タイの高等学校における衛星放送を用いた遠隔教育としての日本語教育ーその現状と課題ー」『国語国文論集』安田女子大学日本文学会 (35) ,2144-2137.
- 宮岸哲也 (2006 a) 「タイの衛星放送による日本語授業の利用促進のために」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』国際交流基金 (3) ,221-226.
- 宮岸哲也 (2006b) 「タイの農村における日本語教育の在り方ータイ東北部のノンカーイ県の中・高等学校での日本語キャンプを通してー」『国語国文論集』安田女子大学日本文学会 (36) ,2234-2227.

## Dispatch of Senior Volunteer who works as a Japanese Language Teacher at Rural Remote Sites of Secondary Schools in Thailand which use Televised Education Programs and the Problems to be solved in the Future

OHSAKU, Masaru (Faculty of Education, Nagasaki University)

AKIHATA, Susumu (Former JALways Co., Ltd)

TOKUHISA, Isao (School of Policy Studies, Iwate Prefectural University)

Long distance education with the use of televised program via communication satellite has been performed in Thailand since 1995. The key station of the televised program is the Wang Klaikanwong School which is located in Hua Hin, about 240 kilometers south of Bangkok. At this school Japanese education program has been performed by the cooperation of Thai teacher and Japanese volunteer teachers. The education program from Hua Hin can be received everywhere in Thailand and around area by the ordinary TV set. However we consider that the Japanese education is not well supported in the rural parts in this country at the present time. Therefore in order to assist the education program in the rural parts, the dispatch of a senior volunteer who works as a Japanese language teacher has been tried during the last two academic years (from 2006 to 2007, and from 2007 to 2008). The schools which stayed the dispatched volunteer were four Rajaprajanugroh Schools. Two of them are located in the Northern Thailand, Pai and Mae Ai, and the rest are North-east Thailand, Nong Khai and Si Saket. These Rajaprajanugroh Schools usually use the televised programs broadcasted from Wang Klaikanwong School. We hope that the dispatch of the senior volunteer teacher will take an important roll to the mutual understandings for both Japanese and Thai persons. It is strongly insisted in the present paper that the arrangement of the support system for the volunteer teacher and senior volunteer is necessary and urgent problem for the success of the dispatch program and distance education in Thailand.

**Key words:** Japanese education, international cooperation, volunteer, senior volunteer, support system

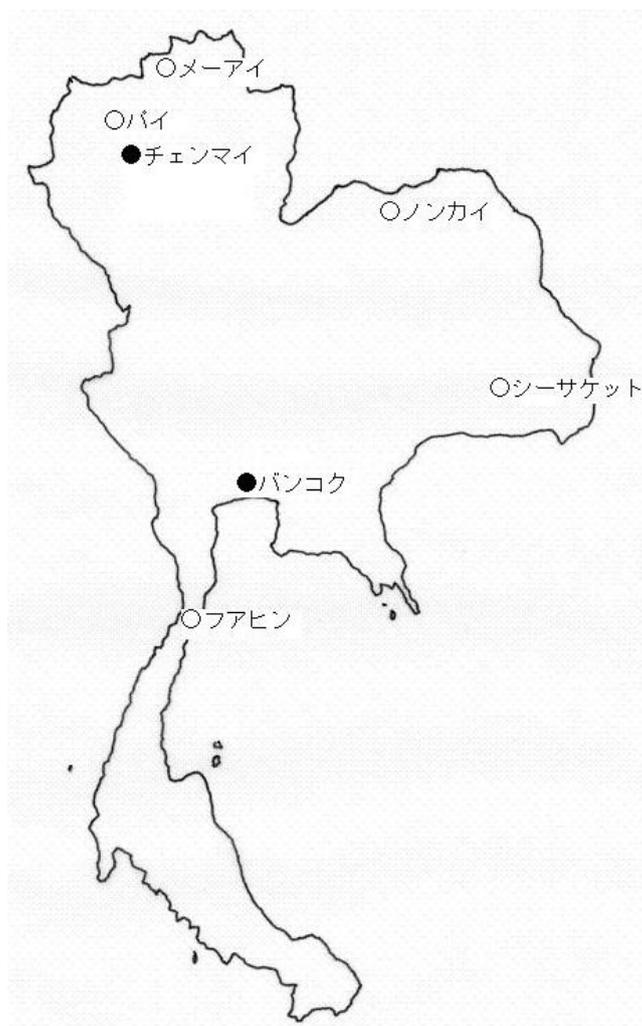


図1 タイ全土の地図とシニアボランティアの派遣サイト（ラチャプラヤヌグロ校）  
（パイ，メーアイ，ノンカイ，シーサケット）

表1 ワンクライカンウォン学校への日本語教育ボランティアの派遣状況

	氏名	出身大学・学部	派遣期間
1	T. T.	広島大・教育	1999年5月～2000年3月
2	H. K.	安田女子大・文学	1999年5月～2000年3月
3			2000年5月～2001年3月
4	N. I.	安田女子大・文学	2000年9月～2001年10月
5	M. M.	安田女子大・文学	2001年5月～2002年3月
6			2002年5月～2003年3月
7	A. Y.	安田女子大・文学	2001年10月～2002年10月
8	J. Y.	安田女子大・文学	2002年10月～2003年9月
9	S. M.	安田女子大・文学	2003年5月～2004年3月
10			2004年5月～2005年3月
11	H. I.	安田女子大・文学	2003年9月～2004年10月
12			2004年10月～2005年10月
13			2005年10月～2006年10月
14	A. O.	安田女子大・文学	2005年5月～2006年3月
15	Y. N.	安田女子大・文学	2006年5月～2007年3月
16	M. F.	安田女子大・文学	2006年10月～2007年10月
17	H. M.	長崎純心大・人文	2007年5月～2008年3月
18			2008年5月～2009年3月(予定)
19	Y. S.	安田女子大・文学	2007年10月～2008年10月(予定)

氏名は、派遣当時のもの

表2 地方サイトへのシニアボランティアの派遣状況

	氏名	学校名	場所	派遣期間
1	S. A.	ラチャブラヤヌグロ第22学校	パイ	2006年12月～2007年1月
2	S. A.	ラチャブラヤヌグロ第30学校	メーアイ	2007年1月～2007年2月
3	S. A.	ラチャブラヤヌグロ第27学校	ノンカイ	2007年12月～2008年1月
4	S. A.	ラチャブラヤヌグロ第29学校	シーサケット	2008年1月～2008年2月



写真1 ワンクライカンウォン学校(ファヒン)



写真2 スタジオを兼ねた教室 (ワンクライカンウォン学校)

スタジオ内の生徒数は通常 25~30 人程度である



写真3 テレビを使った授業 (ワンクライカンウォン学校)



写真4 ファヒンからの放送の受信状況モニター (シーサケット)

各モニターは各学年の授業プログラムを受けることができる (放課後か休憩時間中である)



写真5 学校裏の高台から校舎を望む（メーアイ）



写真6 農作業をしている生徒たち（シーサケット）

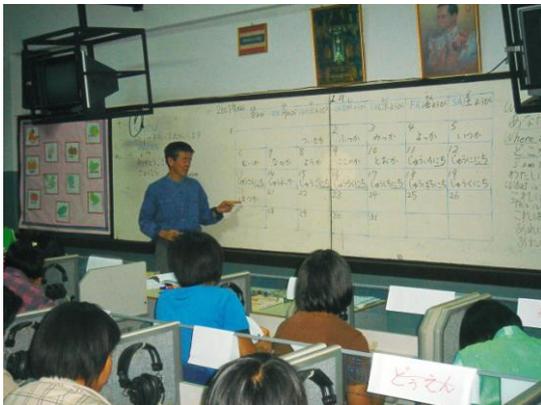


写真7 日本語を教えているシニアボランティア（ノンカイ）  
教室の前面には2台のテレビモニターがあり、  
ファヒンからの放送を受信できる



写真8 日本語教育に使われている教科書と  
ワークブック（ワンクライカンウォン学校）